

令和7年度 第1回神栖市総合教育会議議事録

1 日 時 令和7年10月9日（木曜日）午後2時30分～

2 場 所 神栖市役所3階 庁議室

3 出席者	石田 進	市長
	木之内 英一	教育長
	本間 敏夫	教育長職務代理者
	井口 久恵	教育委員
	井上 剛	教育委員
	鈴木 伸洋	教育委員

事務局職員

教育部長
教育委員会次長
秘書課長
教育総務課長
教育指導課長
教育指導課指導主事
教育総務課担当職員（2名）

4 欠席者 なし

5 傍聴者 なし

開 会 14:30

○教育総務課長

それでは定刻となりましたので、神栖市総合教育会議を開催いたします。

神栖市総合教育会議設置要項第4条により、市長が議長になりますことから、会議の進行をお願いしたいと思います。それでは市長、お願いいたします。

○市長

皆さん大変お疲れ様でございます。お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

それではただいまから令和7年度第1回神栖市総合教育会議を開催させていただきます。

本日の議題でございますが、不登校についてということで、コロナがあつて、全国的にも不登校がだいぶ広がっているということですが、神栖市におきましても同じような状況で、先生方も大変苦慮されながら、日々あたっただいただいているということだと思っております。やはり大事な問題、喫緊の課題ということで、今日は、この総合教育会議で不登校について取り上げさせていただき、議論を深めて参りたいと思いますので、どうぞ忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしくお願いします。

それでは初めに、事務局から不登校についての説明をお願いします。

○教育指導課長

不登校について、不登校の現状、不登校対策の施策、今後の検討課題等について、資料をもとに説明する。

○市長

資料についてずっと説明していただきましたが、不登校の原因をもうちょっと細分化してもらいたいと思っています。ここ最近、急激に不登校が増えていますよね。校長先生出身の委員もお二方いらっしゃるし、教育長も入れたら三人いらっしゃいます。私も長いことPTAをやっていましたが、ちょっと尋常じゃないと思います。これだけの不登校が出るということが。コロナなのか、それともネット社会で夜遅くまでやったりしては、やはり無気力になりますよ、子供は。そういうことで、少し原因を探りたいと思うんです。総論の中で具体策はやっぱり必要なんです。例えば資料で、「安心して過ごせる場を広げる視点へ」といっても、じゃあ何ができるんだという話をしていかないと、役所としての施策に繋がらないですよ。「関係機関との連携強化」も、何があるんですかという話です。例えば、教育センターにどのような機能を持たせていくのかということが大事なんです。不登校の子供たちのために神栖地域と波崎地域で行っている相談にも先生方を配置しています。それがどういう機能を果たしてるのか。現実的に、何人の子供たちが社会復帰したのか。そういうデータがないと、総合教育会議になりません。総合教育会議の司会を市長が務めるにあたり、細分化しないと具体的な施策に繋がらない。例えば、教育センターの機能として校長先生のOBがいるわけですから。そこで、子供たちがどれぐらい学校に来られないのか。学校以外だったら来られるのか。学校以外でもだめなのか。そういうデータが欲しいです、進めていく上で。その不登校がひきこもりに繋がるから、私は真剣なんです。ひきこもり問題は不登校から始まっていることがすごく多いんです。

まず神栖市の不登校児童生徒数について、小学生の不登校が多いですが、どの辺の年齢が多いのか教えてください。

○教育指導課長

中学年から高学年が多いです。

○市長

やはり多感な時期になって、いろいろ動き始めるのが中学年から高学年で、それも昔と比べると年齢が早くなってきています。

もう1つ質問ですが、中学校の不登校生徒は高校へ進学していますか。

○教育指導課長

不登校になっていても、高校へ進学しているケースが多いです。不登校の割合よりも、在家未定の割合はぐっと抑えられています。

○市長

色々な方法がありますからね。高校に行かなくても通信教育もありますしね。そういうことを含めて、大体は進学してるというふうに見て大丈夫ですか。

○教育指導課長

昨年度の在家未定が1.7パーセントくらいなので、98パーセントくらいは進学しています。

○市長

ありがとうございました。

それでは何か質問があればお願いします。

○教育委員

2点ほど質問です。資料11ページの校内フリースクール支援員について、業務内容と関わり方を教えてください。また、15ページに「支援の届いていない層」ということで、「学校に相談できていない家庭が一定数存在」と書いてありますが、現状をご説明いただきたいと思います。

○教育指導課長

まず、フリースクール支援員は、現在、週3日、神栖二中に配置しています。登校利用者は10名程で、登校支援員は常時5、6名います。学習などの教育活動は、自分で計画を立てたり、相談や話をして自分のペースでやるべきこと、やりたいことなどを決めたりしており、それらに関わることが主な業務内容です。

○教育指導課指導主事

フリースクール支援員は教員免許を持っていますので、実際に学習指導をすることもできますし、神栖二中の先生方も必ず1人入り、2人で子供たちの対応をしています。

○教育指導課長

次に、一定数いる学校に相談できていない家庭についてですが、学校に行くことがすべてではないという考えの家庭もあります。うちはこのスタンスで、方針でという

家庭も今のご時世、あるのは事実です。

○教育指導課指導主事

学校も電話連絡や家庭訪問をするんですが、なかなか保護者の方が対応してくれなかったり、学校の方からスクールソーシャルワーカーを案内して繋ごうとしても、「うちはいいです」ということで、保護者の方から断られるケースが多々あるのが現状です。

○市長

保護者が「学校に行かなくてもいいよ」とか、「うちは関わって欲しくない」とか、どこにそういう原因があるんでしょうか。私も子育てしてきましたけど、「学校だけは絶対に行きなさい」という教育でしたよね。それが、コロナがあって、リモートになったりして、社会的に学校が一番じゃなくなってるのかもしれないけれど、基本的な話だと思うんですよね。ところが小学校のよいいどんのスタート段階で、中学校になったら、「学校行きたくない」、「無理に行かなくてもいいよ」って、親がね。何かあるんですかね。

○教育指導課長

小学校就学前に幼稚園などにも通わせずにいるという家庭も少なからずあるのが現状で、小学校へ入った時に子供はそういうのに慣れていないから、最初のスタート時点から、スタートラインに立っていないようなケースも聞かれます。

○市長

そういう人もいるということですね。

今までの説明で気になるところはありますか。

○教育委員

私もちょっと相談を受けたことがあります。保護者側からすると、「学校は敷居が高くて、なかなか気軽に相談できない」、あるいは「相談する施設もわからない」という方が結構いるのが現状だと思います。学校側としては「説明していますよ」といいますが、一般の家庭にはまだまだ知られておらず、自分が直面した時に、はてどうしようと困る方たちがまだまだいるので、相談する施設とか、機会をもっと広げていかなくてはいいと思います。そして、どの子も不登校になり得る状況にあるんだということをもっと強く打ち出していかなければならないという気持ちを持っています。

○市長

他にどうですか。

○教育委員

令和5年度の神栖市内の不登校児童生徒率が千人あたり42人ですが、学校訪問に行くと、もっと多い気がします。見て回ると、大体、各クラス1人、2人いないかなと。

○教育長

多分、空席になっている子達の何人かは、特別支援学級で別な授業を受けているので、時には7、8席空いていたりすることもあります。

○教育委員

それでも多いなというのが、感覚的にはあります。

あと学校生活にやる気が出なくなってしまったそもそもの原因ですが、人間関係、対先生、対学校の中での友達関係とかいろいろ要因があると思いますが、学校の指導のあり方。例えば通知表の付け方も、多分、私の時とは違う評価の仕方をしていると思います。私たちの時は1から5までで、できれば5、できなければ1。あとはマルで評価。マルで評価されて、全体でできてるのか、クラスの中でどれくらいなのか。マルがいっぱい付いていれば自分はできていると思っているかもしれないけれど、ある日、例えばテストでできないとなった時に、ショックで来られないとか。例えば、私の子供の同級生で不登校になってしまった子の事例ですと、マラソン大会で今までずっと1位だったのに、ある年4位くらいになってしまっただけで、そこから学校に来られなくて。自分が一番、主役だったのに、そこから滑落した時の精神的なショック、そういうところから始まるのではないかなと。親もそうですし、学校全体で叱らないとか、もてはやすっていう言葉はあれかもしれないですけど。そういうもてはやされて天狗になっていたところに鼻を折られてショックで来られなくなってしまう。そういう流れが日本全体にあるのではないかなと考えますが、教育現場を見てきた歴代の先生方がいらっしゃるのでご意見を伺いたいです。

○市長

不登校はなぜ起きるのかといったところから意見交換が始まり、委員からは学校の指導の仕方などについて意見がありました。

課長どうですか。今、委員がおっしゃったような点は。

○教育指導課長

まず評価につきまして、学力は5段階というお話でしたが、今も5段階や学年によっては3段階で行っています。昔と違うところは、昔は相対評価で、今は絶対評価です。学力は、評価基準に基づいて評価をしています。あとは行動の記録で、基本的生活習慣に基づきマルが付くというところは、基本的には変わっていません。不登校になるきっかけのお話がありましたが、日頃から学校では、「自己肯定感、有用感を伸ばす」ということはよく言っています。ただそういう中でも、今のお話にあったような、くじけてしまうというか、何かちょっとしたきっかけで壁にぶち当たってしまい、乗り越えるのではなく、跳ね返ってしまうようなきっかけがあると思います。

○市長

資料の9ページを開いてもらっていいですか。ちょっとここで意見交換をさせてもらって、次の10ページ、11ページの施策に移っていきたいと思います。

神栖市の不登校児童生徒数増加の主な要因ですが、無気力・不安が57.7パーセント、生活リズムの乱れが12.4パーセント、親子の関わり方が12.1パーセント。これを合わせるともう8割を超えています。その中で、無気力・不安が6割弱あるというのはどういう状況なのでしょう。

○教育指導課長

文部科学省が定義する長期欠席児童生徒は、当該年度内に連続または断続して30日以上欠席した児童生徒ということで、病気、経済的に不登校とか、その他、先生方が子供たちの様子を見て、保護者と話をしながら、最終的には先生が不登校の要因を判断しています。実際は本当にこれに該当するのかわかりませんが、子供たちがなかなか学校に来られないとか、友人関係がうまくいかないことが不安になって登校できないとか、いろいろなことが含まれた上での、無気力・不安ではないかと思います。

○市長

わかりました。教育長どうですか。この辺の不登校の現状について。

○教育長

自分も以前担当してましたし、今、教育長の立場で大きな課題の1つですので、校長会でも毎回のようにつれていきます。その中で、自分の立場から、校長を通して学校でやって欲しいことのお願いの一番が、無気力・不安の原因を突き止めることです。そこを突き止めないと、手当てのしようがないと。そのためには、子供と先生、あるいは保護者と先生の信頼関係がないと、なかなか本音を言ってくれないので、何とかアプローチして欲しいとお願いしています。ただその足かせになってるのは、やはり働き方改革で、在校時間を短くしていきましようということや先生不足もあります。初めて大学を卒業してきて、今、担任をしている方もいます。先ほど委員がおっしゃった、「学校は敷居が高いし、不登校の時にどうしたらいいか教えてくれない」という話も、実際その先生方も知らない場合もあったりするので、いろいろ複合的なものでこのような結果になっているのかなとは思いますが、ただそこを何とか突き止めて欲しいという思いです。

○市長

あと、もう1つ、親子関係の問題というのはどうなんですか。先生方はなかなかいいにくいでしょうけど。何か、親子の関係が希薄なのではないかという気がしてしょうがない。親が子供にきちんと指導ができない、しつけができない、子供に物を言えない親。そんな気がしてしょうがないんですよ、こういうデータを見ると。子供に「スマホはやめろ」と言えない親。親子関係がつくれないから、スマホに向き合うこともできない。時間を決めましようという、家の中のルールも決められない。それがすべて悪い方向に回っていくような気がして。今、教育長には先生方ができる範囲をお話いただいたわけ

ですが。私はPTAでずっといたから、親がやらないといけないことは、ものすごく多いですよ、家庭教育だから。それで、家庭教育がしみじみしないから学校へ迷惑をかけるだけのことですからね。

○教育委員

本当にそう思います。ある人の話によると、日本は家族のサポートが最下位なんだそうです。そして、学校のサポートは6位ぐらいで、そんなに学校は悪くない。今、家族のコミュニケーションが取れないし、だんだん子供が優位になっている立場なんだそうです。だから最初、「見守っていきましょう」、「話を聞きましょう」と言っても、やはり聞くだけではだめだというような話で、聞く中に厳しさもある程度ないと、家族の中で支援がないと、子供はいうがままに自分が優位になってしまって、親子の逆転が生じてしまうから、自分の思いのままに過ごしてしまう。「そういう根本にあるものが原因になってるのではないか」という人もいます。でも確かに家庭の中で、「だめなものはだめ」とはっきり言える家庭は今、昔から比べたら大分少なくなってるのではないかなと。スマホの問題でもそうですよね。デジタル依存症になっている子供が、すごく多いような気がします。だからそれを「だめだ」と言える親であれば、解決策があるでしょうけど、子供の言いなりになっている家庭が多いのかなという気はします。

○市長

PTAの委員が2人いますので、親の立場でどうですか。

○教育委員

言いなりというか、きちんと子供と向き合って話していないというのが多分、今の現状だと思います。子供からしたら、親に言ってもどうせ「学校に行け」と言われるだけだし、言ってもわかってくれないと考えて多分言わない。だから、その辺りの親子関係の会話、何が原因なのか、やはり親子の中で解決しないと、多分見い出せないと思うんです。それを学校に解決を求めても無理だし、先生にそんなノウハウも時間もないし、だから私は、親子の中の対話がきちんとできれば、多少改善すると思います。

○市長

そうですね。

○教育委員

実際、私の子供は今保育園で、ついこの間、「保育園に行きたくない」と言って。なぜ行きたくないのか、とことん話は聞こうと。保育園に8時に着いて、9時まで子供と話して納得させて。これを1週間くらいずっとやって、それで行けるようになった。子供も語彙力がまだないので、ただ「怖い」、「お昼寝が怖い」とか、言いたいことが何かわからない。伝えたいけど伝わらない。それでも、根気よく聞いてあげないと。本当の理解者、最後サポートするのは親だと思うので。その上で学校や行政側ができることは何

でしょうか。なかなか難しいですが、システムとかをつくってあげられたらいいなと思います。

○市長

他にどうですか。

○教育委員

質問よろしいですか。

全国との比較ですが、近似して、ちょっと神栖の方が小学校も中学校も上回っている。誤差の範囲だと思いますが。国もこの原因は調査していると思うんですよ。資料9ページの神栖市の不登校児童生徒増加の主な要因というのは、市独自の調査で、無気力・不安が多いということですよ。全国の調査では、原因はどの辺にあると考えてるかどうかのデータはありますか。

○教育指導課指導主事

資料6ページにあります。同じような傾向です。

○教育委員

傾向は同じなんですね。これは令和元年からのデータだと思いますが、これがどの辺りから上がり始めたというのは、どこかにありますか。私が気になっているのは、やはり市長も皆さんもおっしゃっている、親との関係、あと学校だと思いますが、自分の子供を見て、学校の先生があまりにも児童に対して気を遣い過ぎている傾向があると思ったんですよ。例えば、大人と子供なのに、「さん」付けで呼んだりとか。そういうところで、教師と子供の信頼関係はされていくのかどうか。私、何の根拠もなく言っていますけど。どの辺りからこうなっているのかを検証して、学校でできることはその辺りなのかなと。私たちの時は、親に「学校に行きたくない」と言えなかったですよ。それが良かったのか悪かったのかわからないですけど。でも子供も学校に行っても楽しくないんだろうと。不安というか面白くない。あとコロナで、家の中で生活することに慣れてしまった世代が出てきているから、この不安・無気力について深掘りしていく必要があるかなと思います。

○市長

今、委員がおっしゃっている一方で、真面目に学校行くのが当たり前だとしてきちんと学校に行っている層も必ずあります。ところが一方では、不登校でも別に行かなくてもという層が広がってきているというのが社会的に問題になっているんです。今、現状から原因の話をしてきましたが、そろそろどのような施策がいいかという、資料10ページ、11ページ以降に移りたいと思います。

○教育長

ちょっといいですか。委員がおっしゃった、どの辺から学校の対応が子供や保護者に対して甘くなった、優しくなったかという点ですが、やはり世の中で子供の権利条約が認められて、それからジェンダーがフリーになってくる。それから大人と子供の境をなくしようという動きが平成の終わり頃から流れてきて、私なんかも自分の世代だから、子供を呼ぶのに、男の子は「君」、小さい子は「ちゃん」でいいだろうと思っていたら、世の中の流れはそうではなくて、男も女も小さい子も大きい子も全部「さん」という流れなんです。それはちょっとまだ早い、違うんじゃないかという考えの人と、やっぱりもうその流れで行こうという人と。学校もそうだし、世の中も何か混ざってきた感じがします。それから保護者がいろんな要求を学校にすることになってきたというのと重なっています。

○市長

そういう流れがあつての話ですけど、色々な考え方が混在している社会ですから。

10ページ以降の色々な対応策の中で、間違いなく保護者対応をやったほうがいいと思います。これはPTAと連携してやりましょうという文言を入れてもいいと思う。PTAも、私たちが活動していた時と時代は違うかもしれないけど、もともと単Pは単Pで、県Pは県Pで、市Pは市Pで色々な研修の時間を持ってるはずですから。その中で、子育てについてきちんと話ができる講師を呼んで向き合うこと。もうちょっと家庭の中に関わることを、この時はどうしたらいいんだ、子供とどうやって向き合うんだということを、いちいちやったほうがいいと思う。私がPTA会長に就いていた時に、共働きの家や母子家庭の家とみんなでパネルディスカッションをやったことがあって、実際は、自分の子供の教育は何もやっていなかった自分に気がついて、自分の子供に向き合った。みんなそういうことなんですよ。子育てしながら親が変わっていくんですよ。その辺を、若いお父さん、お母さんたちも向き合っていないと。やっぱりどんなに仕事が忙しくても、向き合っていないと親子関係は成り立たない。だからこの中の不登校対策の施策として、まずは親の意識だと思うんですよ。そういった部分を委員の皆さんがよければ、できれば入れてもらいたいと思います。

委員として何かこれはできると思うものはございますか。

○教育委員

私、5年間ほど、社会教育指導員を務めさせていただきました。小中学校、保育園の保護者がそれぞれ学校単位で集まって、子育てについて色々なテーマを決めて話し合いです。4名程でいくつかグループをつくって、ある課題について話し合い、意見をまとめて発表します。その時、自分ではない家庭のことを話し合うことはとても大事ななと思いました。どれが正解ではないでしょうけど、自分と違ったやり方で子育てをしているという感覚を持って、皆さん帰って行きました。だから私もその時はすごく楽しくて、社会教育指導員の仕事をさせてもらってすごく自分も学んだし、もう1回子育てしてみたい感覚になりました。話をする中で、やはり基本になるのが家庭で、週1回でもいいから、夕ご飯をみんなで食べる。それぞれ少しずつ努力をしながら、時間を調整して食

卓を囲む。これがすごく意義があるようなような感じを持ちました。あるいはその当時の早寝早起き朝ご飯という、家庭の基本的なこと、そういうことが子育ての基本になっているなあというのを自分なりに再認識すると同時に、そういう中で子供が親にきちんと話ができる関係。今日学校であった話ができる。嫌なことの話ができる。親がそれをきちんと聞いて、色々アドバイスもしてくれる。日常の中でそういう機会が増やせることで一つのいい方向に向いてくれるのかなということを、その活動を通して感じました。

○市長

ありがとうございます。

どうですか。気がついた今後の施策、取り組みとかですね。

ちょっと私、もう一点言っていていいですか。一番は人間関係だと思うんですよ。1つは今、仮定を言いましたけれど、もう1つは、先生方にはやはりクラスの中の限界があるので、いわゆる家嫌いになった子供たちとどういう人間関係をつくるかだと思っているんです。それを全力で60歳で終わった先生方に、65歳までの間、全力で不登校対策をやってもらいたいんです。経験のある先生方に。それは人間関係をつくらないとだめなんですよ。子供たちとどうやって人間関係つくるかなんですよ。私、1回もクラス担任になってもらったことのない新任の先生の家に呼んでもらって、数学を教えてもらったことがあって。もともと数学ができたけど、余計できるようになってしまった。そういうことで自信がつくんですよ、子供たちって。だから、65歳までの先生方に情熱を持って、不登校になった子供たちの精神的な柱になってもらいたいと思うんですよ。オンラインで人間関係ができるかどうかわからないけど、やっぱりフェイス・トゥ・フェイスがいいに決まってるし。その辺の部分というのは必要だと思うんですよ。そして、原因はやはり家庭にあるんですよ。そういう中で、先生方にも活躍の場は必ずあると思うんです。色々、スクールカウンセラーとか入っていますよね。私が今日、もう少し具体的に話したいと思ったのはそこなんです。教育センターにも先生方がいますよね。その教育センター機能として、神栖の不登校を何としてもなくすというような決意表明をするというような形があると、すごくいいんじゃないかと思うんですよ。

委員、いかがですか。

○教育委員

不登校は、親も相当数、心理的ストレスがあると思います。例えば、神栖市職員の中にもそういう状況の人がいると思うんです。私は今、自営で仕事をしているので、子供に8時から9時まで付き合っていました。これが会社員だったら厳しいですよ。自分も会社に行かないといけないし、子供を早く置いていきたいです。その時に事業所の理解というのが、どうしても必要だと思います。親の介護もそうだし。もしそれが1日、2日だったらいいかもしれないですけど、ずっと続くとやはり職場にいられなくなってしまって辞めるとかになると、社会的な損失になるので。例えば、神栖市職員の中で、そのようなことがあったら、できれば市が率先してして対応いただくことで、他の事業所も見習ってやろうかなというところが増えていくかもしれないので。子供に対するサ

ポートは、やりやすい部分もあると思いますが、親もサポートしてあげないと。

○市長

他にどうですか。

○教育委員

ここ数年、新卒社会人ですよね。辞めるときに上司とコミュニケーションがとれていなくて、弁護士を通じて退職届とか。ニュースで皆さんもご存知だと思うんですけど。その世代と、先ほど平成の終わり頃からということでしたが、そことはあまりリンクしていないんでしょうか。つまるところはコミュニケーション能力だと思うんですけど。その場合、やはり家庭も学校もそこがマストになってくるのかなと思ったのと、あとICTは、今この時代なので、当たり前といえば当たり前なんですけど、コミュニケーション能力が必要なくなってくるツールの1つになってしまうので、やはり使い方なのかなと思います。あと、「授業がもう理解できてしまっていて、学校の先生の話がつまらない」と言っている子もいると聞いたことがあるので、そこも見過ごさないよう学校の先生にはアンテナを張っていただいて、持っている能力を生かせるような道筋をつくってもらいたいなと思います。

○市長

ありがとうございました。

先ほど委員がおっしゃった、市職員の、例えば不登校で困っている職員へのフォローアップ体制。職員も家で色々あっても困っていることを表には出さない。やはりワークライフバランスと言っているけど、市職員の仕事は苛酷ですよ。人が少なかったりするから。だから人も増やしてきた、若干。私がリーダーだから、私を変えていくという強いリーダーシップがないと、なかなかできないと思うんですよ。ワークライフバランスと言いながら、できているのは少しづつだもんね。

○教育委員

子育てに限らず介護もそうだし、結局私は、家のことが充実しないといい仕事ができるわけがないから、そちらを優先してと。そちらができていい仕事。体調もそうですし。勤めているみんなには、「家を優先してくれ」という風に言っているんですよ。市役所内も風土としてできればいいなと思います。

○市長

所管は違うけど、教育部長から一言言ってもらいますから。

○教育委員

反対に学校の現場で、教員として何かもうちょっとできるかもしれないとか、何かないですか。今、教育現場から離れているけど、もし仮に今戻ったとしたら、自分だった

らこう対応したいとか、そういうことがもし皆さんあれば教えてもらいたいです。不登校に対してとか、そうなりそうな子供に対してどういうアプローチができるか。

○教育指導課長

先ほど委員がおっしゃられた、つまらないとかICTのところからちょっとお話をさせていただくと、我々、特別支援ということで、ちょっと支援が必要ということはあるがちなんですけども、やはり今の流れでいうと、指導の個別化、学習の個性化というところで、上位の子もどんどん上げていくような手だても必要という話があります。そこはちょっとまだ足りない部分もあり、このICTを活用しながらというのが大事なところかなと思っています。

あとは、先ほどの「さん」付けのところだと、子供の人権を尊重するという流れがあります。そこは今、先生方も昔は呼び捨てだったりとかあるんですけども、授業の中ではドレスコードではないですけど、きちんとやっていこうという部分が何となく浸透してきているというのが感じられます。

子供たちも小さな社会の中で生きているという中で、学習も不登校も課題になっている部分で子供たちが安全に楽しく過ごせるというところをつくるのであれば、やはり教職員のやりがいとか環境というのが大事なのかなと考えています。先生方は、子供たちが一番よく見ている大人ですので、働きぶりとか、働きやすさとかが肝になり、それが浸透していった子供たちの学力や不登校対策につながっていく。そのような姿を見て子供も成長していくと考えています。

○市長

色々な角度からお話いただきましたけど、教育部長、いかがですか。

○教育部長

私もお子さんのことで相談をされたことはあります。ただ、休暇として看護休暇というのはあるんですけど、この場合、看護ではないんですよ。具合が悪くて云々というのは看護休暇になるんですけど、やはりそういったものには当然使えませんし。そうすると継続的にお休みをしながらということになると、親のことは介護休暇があるんですが、子供のことは市長がお話をされたように、本人も責任感だとか、自分のことは後回しになって、やはりちょっと苦労されている方はいましたね。

○市長

私も今日は課題にして、職員課とも打ち合わせがありますから、そういう項目も入れてもいいですね。

他にどうですか。

○教育委員

そうですね。今後の2学期制の話も出ていて、保護者会とかを多くするというような

話が出ていたんですけど、学期末の話し合いでも担任の先生から一方的に話をして、それを保護者が聞くという、学級懇談とかはそういう状況なので、そういう中に、保護者同士が悩みを話し合えるようなシステムを設けてもらえるといいかなと思います。「うちは実はこうなんですよ」とお互いに意見が言えて、他の家庭の教育の仕方とかもわかり合える、学校側でそういった親同士の話し合いとかを増やしていくことも1つの方法かなと思います。

○市長

その通りですよ。他にどうですか。

○教育委員

家庭ではなくていいですか。学校という立場から。

私、新任校長の時に、20年くらい前なんですけど、どういうふうに学校経営をしていくかなとなった時に、欠席者ゼロの日運動を通してというのを1つの方針として、3年間やったんです。そのためには、先生たちに対して、「子供一人一人を大切する個別の時間を少しでもいいからつくってください」、それから「子供たちと先生の人間関係を円滑にするために、学級の風土をできるだけつくるように努力してください」、当然のことながら「保護者と連携しないといけないので、そこを密にしてやってください」ということで、これを通して先生方が何か、だんだんそういうことに集中しながら学級づくりをして、結果的に1年間で欠席ゼロが5日。300名くらいの学校でしたけど。ある意味ではよかったなと自分で実感したんですね。だから、さっき市長おっしゃったように、「具体的なものを出す」ということがすごく大事だったなとその時思いました。そうすることによって学校がある程度まとまって、職員がいい雰囲気できたかなと。この欠席者ゼロの日運動を通して、それに向かって先生が努力してくれたことを今、話しながら思い出しました。

○市長

ありがとうございました。

ではこの辺りで教育長、一言いただけますか。

○教育長

ちょっとご意見を伺っていた中で、最初市長がおっしゃっていた「不登校の子たちの進学はどうなってるのか」ということですが、ほぼ進学してます。ただその進学の90パーセント以上は通信制です。通信制は間違いなく受け入れますから。ただその子たちがその先高校を卒業しているか、学校に来ているか、卒業しているかは、我々は今掴んでいません。それから、時代が変化しているので、当然といえば当然ですけど、間違いなく子供の我慢する気持ちとか耐性も落ちています。それをつくっているのは家庭であり、学校にも責任はあると思いますが。学校の今の全体的な姿勢は、やはりこの不登校の問題がすごく大きいので、家が、お父さんが、お母さんがとか、必ず校内では出ます。

出るんですけど、現状、表は家庭のせいにはしないで、自分らがどれだけできるかというところで勝負しているという感じです。中には踏み込む先生もいるんですけど、その先生はやはり風当たりも大きい。もちろん収穫も大きいですから、そういう方も中にはいます。ただ、その前でやめておく方も多いです。これ以上突っ込んだら、もうトラブルになるなど。ただ、やはり校長としては最終的にできるだけその子供の本音に近づいて欲しい。それがわかれば、何か糸口があるんじゃないか。先生が嫌いなら、ちょっと話せる先生もいるんじゃないか。そのようなところへ繋がったらいいかなと思っています。

○市長

今日は貴重なご意見をいただきました。私も少し、教育センターの話を出させてもらったり、今、学校の中での取り組みで、欠席者ゼロの日をつくろうという取り組みの紹介もありました。今日の会議でお気づきの点がありましたら、この後まとめていただければありがたいと思っています。教育長中心に、よりよい教育体制をつくってもらいたいと思います。

今日は皆さん、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

開 会 15 : 47